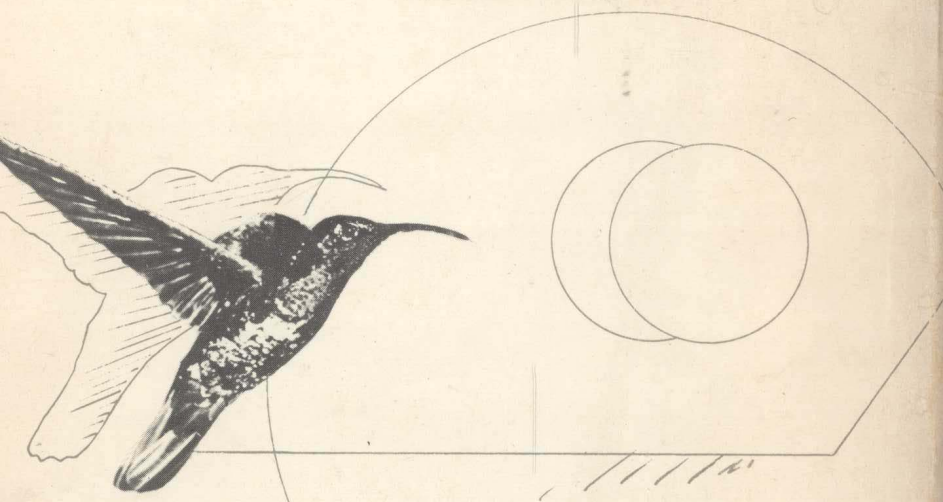


詩よ、光の夢の中を

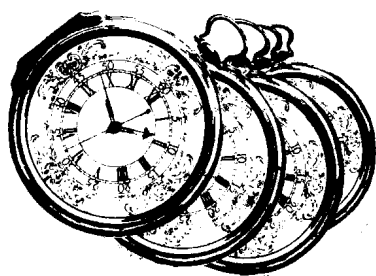
清水 昶



小沢書店

詩よ、光の夢の中を

清水 昶



小沢書店

詩よ，光の夢の中を

昭和52年10月10日 初版発行

著者 清水昶

発行者 長谷川郁夫

発行所 株式会社小沢書店

東京都千代田区富士見2-5-12 Tel. 263-9218 (代)

印刷 凸版印刷 製本 大口製本

©A. Shimizu 0095-135209-0791

詩よ、光の夢の中を

白い障子だけが浮きでている薄暗い家で呪文のようなことばにおびえていた 病弱だったわたしは寝たまま全身を金縛りにされたように硬直させつめたい指でいたるところを触れられているのである 父の姉は祈禱師だった

無医村にちかいその村では まだ彼女のちからが病者を充分支配していた わたしの少年時代の話である 村を離れて十数年ののち わたしはその地を訪れた かつてのわが家の跡地は水田に変わっていて春の陽ざしをも

の憂げに吸っているばかりである 日没の早い山間の村の畔道に坐り込んで まだわたしの中で生まなましい「呪文の家」をまぼろしのように想った そこにいるわたし自身のほうが あるいはまぼろしであるかも知れぬと考えることもなく……村人の話によると診療所の唯一の医師は麻薬中毒で狂死したという 父の姉は生きのびた 孤独地獄に堪えるためには医術よりも呪術のほうがつよかったというべきか

薪の火をかこむようにして共生すること それはたぶん銀河系の一滴たる人間の卑小にして偉大な願いである だがわたしの心は悲しいまでに放浪する 薪の火は遠い星のように頭上をめぐる 永い幻影がわたしに憑いた

わたしは幻影を喰い繋ぎつつ生きのびた いやそういう社会から生かしめられてきたと思っていた 自己処罰へと錐揉みしながら堕ちる感覚 それがわたしの青春だった

た 果てしなく堕ち込みをふかめる日々「癪者の輝き」という短文に触れた 黒田喜夫のことばだ 生の実体を失っていたわたしはそのことばを手掛かりにしてむさぼるように黒田氏の詩とエッセイを読みあさった 黒田氏は書いている 「河を渡って木立の中へ、ではないが、河を渡って桑樹の葉なみをながく潜って行くと、とつぜん襲ってくる光の夢がある。暗い桑樹の葉なみが切れたところにぽかりと浮かびあがると、白日の下に輝く癪者の家。追われ流亡した癪者の家と庭の輝き。」

わたしの幼少年期の感覚が不意に目覚めた 文明の埃ひとつ落ちていそうもない山河の風土の感覚だ 光と影だけでできている世界 わたしは そんな世界に常住の心をのこしたまま迷いつづけていたのである

黒田喜夫は自己を一人の癪者とみたて疎外の極致を生きようとする しかし幻想の癪者を生かしめる「絶望さ

えも拒絶しつづける生のもつ絶望」をなおも支える巨大な沈黙の風土のエネルギーとは何だろう あらゆる論理が沈黙する場所 だれの心の中にもあるそんな場所を抱き込みつつ そとがわから新しい思想を組むことはできないものか 唯物的な疎外論では捉えきれぬナショナルな実存の問題……

たとえば「私」を産み生かしているものは自然を底にした類的社会だ だが近代を生きる者たちは しばしば原初から「私」が「私」を生かしているかのような錯覚に陥った 黒田喜夫は「私」を類として語る数少ない思想家詩人だが類もまた総ぐるみ階級的物質的くびきに呪縛されて在ることを発想の根幹としたため 階級の器のうちがわでのみくるしげにみずからの民の風土の精神をまわさざるをえなくなったのではなかったか

逆に民の風土の精神を器にして階級概念を構成したらど

うだろう 不安定な「もの」に支えられた階級は絶えず
流動を繰り返すが わたしたちを産み生かしめる風土
の精神は絶対であるはずだ

わたしは正統な左翼ナショナリストの出現を期待してい
るのかも知れない おだやかな喜びや悲しみが渦巻いて
いる巷がそのまま「国」になるような夢への賭けだ そ
こに熱狂はいらない だから詩もおだやかな生の根拠を
求めるために熱狂的に書き継がれてしかるべきなのであ
る

(1977. 2「現代詩手帖」)

目次

詩よ、光の夢の中を 1

I

G I 15

少年期 19

われらの「あんみつ姫」 23

水木しげる氏への手紙 27

無性格な青春 30

線の旅 34

生き生きとした死者 37

蕪村の俳画について 41

II

てんぷら屋の孤独 47

なげけとて 54

太宰治 57

ああ受験生 61

もしもあの時 64

止木に集う君よ、席をゆずってくれ給え 68

日録 A 73

日録 B 79

Ⅲ

水上の月 89

中原中也 110

田村隆一について 119

袋は袋を破れるか 131

見えない隣人 147

生命とはほとんど罪であるのか 162

Ⅳ

歌の正統性をめぐって 173

白昼の歌人 186

雪のシャワー 193

詩とイメージ 214

精神の影としての詩 218

わたしの「荒地」 227

あとがき 230

装画 高柳裕

詩よ、
光の夢の中を

